

彼氏でない彼、彼女でない彼女

kojimatsu

中心街から少し離れたオープンカフェ。
大通りに面しているが、日中は車の往来も少なく
お茶を飲むのはこの場所と決めている。
二浪して東京からこの地方都市に大学進学のために来て1年。
ここにしかない学部があるからと来てはみたものの
知らない人ばかりというのは結構疲れる。
小学生の頃の「転校生」というのも結構大変だったんだろうなと
今になってつくづく思う。
東京育ちなので車の往来が多少あっても、人の少ないオープンカフェは
開放される場所のひとつである。

大学から車を走らせて向かった土曜日の午後
今日は助手席に彼女を乗せていた。
彼女といっても、いわゆる彼女ではない。
彼女は高校2年生。4つも年下なのである。
社会人にもなれば、恋愛においてこの年の差は普通だと思うが
「高校生」と「大学生」という関係においては違和感がある。
少なくともそう考えている・・・要は年下が苦手なのである。

彼女も実は、4年ほど前にお父さんの仕事の関係で
名古屋からこの街に引っ越してきたそうだ。
～中学生の「転校生」～それも結構大変なんだろうな。
半年前に大学の友達の紹介で知り合った彼女。
それから月に数回は会うようになった。
お互いに決して友達は多くないようだ。

何を話すわけではないのだが
彼女はいつも背伸びをしたことを口にする。
合わせてくれているのかも知れない。
ただ大人びた会話の中でも笑った時は高校生だ。
そのギャップにいつもほっとする。
大人びたとは言え、他愛もない会話には違いないのだが。

春の日の午後の日差しを浴びながら
今日もコーヒーを飲みながら会話は進んだ。
おぼろな雲に日差しがさえぎられた時、彼女がつぶやいた。

「あのさ、彼女いないの？東京に」
こんな事これまで彼女の口から出てきたことがなかった。
今、目の前にいる彼女は彼女ではないし
東京に彼女がいるわけでもないのだが緊張した。
「いないよ」
この言葉の後の展開が面倒なことにならないように
できるだけ普通に、できれば他の話題になるように答えた。
年下は彼女としての対象外だから。

「わたし、彼氏がいるの。」
面倒な展開にはならなかったが、自分の頭の中の整理がつかなくなった。

「彼氏35歳なんだ。」
今日で彼女と会うのもの最後になるかと思いながら
声も出ないまま、表情だけは平然とさせた。彼女は続ける。
「でもね、彼氏とは別れたほうがいいと思うんだ。」
「お互いに」
このお互いとは彼女と彼女の本当の彼氏のことである。

「えー。彼氏のこと嫌いなの？」
話題を変えることができないまま、ありきたりの事を彼女に聞く。
「・・・」
「彼ね、右足が少しだけ不自由なの。」
「それが嫌いな原因？」
「・・・うん」
「彼はいつから足が不自由なの？」
「1年前から」
「彼とは付き合ってどのくらい？」
「1年半くらいかな」
「それって、最初の彼は好きだったけど、足が不自由になったから嫌いってこと？」
彼女がこういう性格だとは思わなかった。高校生ゆえなのか
35歳という年の離れた彼を持つような彼女だからということなのか
彼女の彼氏の代弁者として、男の代表として少し感情的になった
春の日差しの中に潜む紫外線のように。
沈黙の後、彼女がつぶやいた。
「彼ね、交通事故にあったの」
「私を助手席に乗せて」

一転、にわかに春雷のごとく心の中に衝撃が走った。
「1年位前かな、デートの帰り、私を送ってくれる途中で」
「対向車がセンターラインを越えてきたの」
「気が付いたら私は・・・彼の体の下にいた。」
「彼は対向車を避けようとハンドルを左に切り、そのまま私を守るために・・・」
「彼は私のことをかばったの、助手席の私に覆いかぶさったの」
昔学校で見たスライドのように、その1枚1枚を思い出しながら彼女は話した。
いやもしかすると、彼女の中ではこのスライドが毎日セットされていて
1日に少なくとも1回は、頭の中で投影されているのかもしれない。

「普通はね、右から来る対向車にとっさにハンドルを左に切らないんだって」
「だって左に切れば向かってくる対向車に自分が近づくわけでしょう。」
「瞬間的に自分の身を守りたいからハンドルは右に切る。」
「そして助手席の私が、車の衝撃を一番受ける。」
彼女は自分の頭の中のスライドを、本当はこんな風に差し替えたいのだろう。

「なのに、なのに彼は左にハンドルを切って」
「私にできるだけ覆いかぶさるためと車をスピンさせるために」
「右足で思いっきりブレーキを踏んだの」
それで結果的に彼は思い切り突っ張った右足に対向車の衝撃を受けて
歩けないことはないが、ハンドルを左に切る前の彼の足には戻らなかったのだ。

彼女の大人びた話し方は「35歳の恋人」と「その恋人との事故」という経験、それは普通の高校生ではあり得ない経験から来るものなのかと感じた。

「とっさに、しかも命を投げ出せるほど愛されているなんて幸せじゃない。」

薄っぺらい子供のような反応をみせる。どちらが高校生なのか、というか彼女の方が大人なのだとことをはっきりさせてしまったような問いかけだった。

「そう、確かに愛されていると思う。」

「それは今も変わらないと思う。私も彼も」

「だけどあの事故から変わったことがある。」

「私も彼も」

そこで彼女は暫く沈黙した。

これまでの彼女の話も整理できないまま、ここから先に彼女がどんな言葉を発するのか彼女がまるで春の霞に包まれたように遠く思えた。

「変わったことって？」

その問いかけに彼女の唇が動き始めた。

「別れることができないとわかったの」

「たぶん彼もそう思っている。」

「お互いに好きなんだと思う。好きなことには変わりないと思う。だけど私は彼を結果として傷つけたことへの責任がある。彼も35歳で傷ついて、この恋愛が終わってしまえば、次の恋の確率は低いと・・・」

彼女は言い過ぎてしまったと思ったのか、そこで言葉を引いた。

心なしか彼女の頬が桜色になった。

「好きよ。本当に彼のことが。」

「だから彼とは一緒にいたい。だけど絶対にこの恋は終わらない、終わらせられないと思うと、それは恋ではなくなるというか、私はこれでいいのって？」

「でも彼は命を助けてくれた人、あの事故で私は死んではいなかったかも知れないけど、彼が私の身を守って傷ついたことには変わらない。」

「そこまで自分を追い詰める必要はないんじゃないかな。彼も35歳だし、君のことを自由にしてあげたいと思っているんじゃないかな。」

相変わらずの薄っぺらな言葉しか出ない。

「ううん。わかるの。確かに事故の翌日、彼の病室に言った私に“俺もこんな体になってしまったし、君は自由にしたらいい”って言ったの。だけど彼は別れようとは言わない。私が今こうして、男の人と二人で会っていることも知っている。だけど彼は何も言わない。ただ笑顔で黙って見ているだけ。」

「でもね。どちらにしても同じなの、彼が“別れよう”と言っても、結局私も別れることはできないと思う。別れても同じこと。だって彼は存在していて、存在していなくても存在していて・・・」

彼女の言葉さえぎるように

「会うよ」

「えっ？何？」と彼女。

「彼に会うよ」

なぜそんなことを言ったのか理解できなかった。勿論彼女にも。ただ多分、ここまでの会話が彼女とまるっきり大人と子供の関係が逆転した中での、無意識の抵抗だったのかもしれない。

そして一度言ってしまった以上引き下がることはできなかった。彼女も予想もしていなかったのか、この状況を覆すことはできなかった。本当は彼女以上に覆して欲しかった。結局はそれくらい彼女よりも子供なのだと感じる羽目になった。

それから2週間後のもう梅雨がしまろうとしていた週末。

今にも雨は降り出しそうだったが、いつものオープンカフェで彼を待つ。

結局、彼女は彼と二人だけで会う約束を取り付けてくれた。

彼女が何と彼に説明したのかは一切知らない。

約束の時間が少し過ぎた頃、オープンカフェにブルーのBMWが入ってきた。

彼の顔は勿論知らなかったが、その車の運転手が彼であることは直ぐにわかった。

なぜなら、少しだけ足を引きずっていたから。

ただ思っていた以上に重症でなかったことになぜだか少し安心すると同時に、それ以上に二人の心の傷の方が複雑で深いものなのかもしれないと感じた。

近づいてくる彼に、立ち上がり会釈をして迎えた。

「こんにちは。君が僕に会いたいという彼？」

「こんにちは。その通りです。はじめまして。」

お互いに名前を名乗り、たわいも無い会話が始まった。彼の話からすると彼女はこの間の出来事を正確に彼に告げてくれていたようだった。

彼はパソコンのプログラマーで、今は独立して数名の従業員もいるらしい。都心よりもこの地方都市の方が従業員の人件費も多少は安くていいのだそう。そして学生時代はサッカーをしていたこと。中学、高校と6年間部活動として続けたが決して上手くはなかったというのが彼の自己分析だ。

彼は話が決して上手というわけではないが、だけど優しいしゃべり口調で、聞いている者を和ませる感じだった。今日の出会いのきっかけが「彼女」であることなど忘れてしまいそうだった。でも話をするうちに違和感を覚えた。

そう、彼は決して質問をすることが無かったからだ。こちらに対して一切何も聞かなかった。ひたすらに彼は自分の事だけを話した。時にこちらが会話に入ることを遮るくらいに。周りから見れば誰も違和感は無かったかもしれない。なぜなら彼は、その「演説」を早口や大声で進めるわけでもなく、何か相手を説得するような抑揚をもって話したわけでもないからだ。

何気なく移り行く春から梅雨、しかし時としてこの時期の雨は冷たい事もある。それは優しい雨でも、うたれた人にしかわからないだろう。

彼はその演説に一段落ついたので、来た時に注文したアイスコーヒーの汗のかいたグラスに手を伸ばした。それから一呼吸おいて話し始めた。

「君、彼女の新しい彼なの？」

不意をつかれたこと。彼が笑顔だったこと。年下は彼女として対象外であること。それらが頭の中で一気にぶつかった。

「何ですか。」

彼の問いに対する返答は「いいえ」が正解だった。

「いやいや。彼女が会って欲しいというから・・・普通に考えたらそうでしょ。」

「違います。」

今更遅かった。最初に否定しない限りこの「違います。」は言い訳にしか聞こえない。

「いいんだ」

“何が？”と彼に聞き返したかったが、その間もなく彼は続けた。

「君が新しい彼氏だと言うならいいんだ。彼女には幸せになってもらいたいし。」

「彼女が僕と別れたいのならばそれで。」

「ならば別れてください・・・彼女と。あなたの口から、それを彼女に伝えてください。」

「やっぱり君が新しい彼氏なんだ。」

どうしてこんな状況になってしまったのか。考えている間に彼が続けた。

「彼女が別れると言わない限り別れない。理由は一つ、彼女を愛しているから。言える訳ないじゃないか。」

冷静に考えればどんな立場で彼と向き合っているのかわからないまま会話は続いた。

「彼女の事、愛していないんじゃないのですか？少なくとも今は。」

「どうなのかな。確かなのは自分から彼女に別かれようとは言えない。それは愛しているから。ただ、それならば本当は自分から言わなくてはいけないのかも知れない。でも彼女には言うて欲しくない。」

彼はこの時、目の前にいる彼女の新しい彼に喋るでもなく、当然それ以外の誰に対して喋るでもなく喋り続け、その声は独り言のように段々と小さくなっていった。

彼の頭の中の彼女に対するプログラムは、あの事故を機にどこかが壊れてしまっただろう。例えばそれは、その数式の「＝」の長さが微妙に違うとか、周囲は当然、彼自身にも見つけ出すことはできないのではないかと思う。そしてその「バグ」のため、彼女に対するプログラムは「その解」を導き出せないまま彼の頭の中でぐるぐるとループしているのだろう。

それは彼女の中でも同じようにループしているのだと思う。ただ彼の「バグ」と彼女の「バグ」はその内容が同じかどうかは、二人の話を聞いた今でも判断することはできなかった。

彼の飲みかけのアイスコーヒーのグラスの中の最後の氷が消えた時、彼が言った。

「でも、今思うことがある。どうしてあの時、彼女を助けたんだろう。」

あれから3週間が過ぎた。

彼女から連絡はなかったし、彼女にも連絡することはなかった。というより、彼女に何を言ったらいいのかわからなかった。

ある日の事、突然彼女から電話があった。

「今から会える？」

いつものオープンカフェで待ち合わせた。

もう梅雨も終わろうとしている日差しが強い午後だった。

「ドライブに行こうか？」と彼女。

「どこに行く？」彼女に聞いた。

「んー。空港！」

今や地方都市にも空港がある時代で、ここから車で1時間も走ると5年ほど前にできた空港がある。2人は特に何を話すでもないまま少し湿度の含んだ風の中を走った。そして空港のデッキから丁度着陸してきた飛行機を2人で眺めていた。

「ありがとう。」彼女が笑顔で話し始めた。

「何が」

「私の事をいつも自由にしてくれたよね。私は彼の存在から逃げる事ができなかった。だから私はいつも束縛されていた。でもあなたという時は忘れられたし、何でも許してくれた。今日もこうやって、何も聞かずに空港に連れてきてくれた。」

彼の存在を知ったのは最近だけど、いつも自由でいること、好きなことをしてくれる彼女を見ていることが好きだったのは事実だった。

「あたし」

「今からあの飛行機に乗るの。」

「お父さん、転勤なの。」

心の中で彼女の言葉を受け入れられていないことに気が付いた。

「お父さんの転勤って、学校はどうするの？」

彼女は笑顔のまま答えた。

「お父さん、本社勤務になったの。だから実家へ戻るわ。だけど私は正確に言うと戻らない。カナダの高校に秋から行く。向こうは秋が新学期だし、今から準備。大変だけどね。」

「本当に、本当にありがとう。」

彼女はそう言うと、デッキから出発ロビーへと向かった。

彼女を乗せた飛行機を、一人デッキで見送った。

彼女とはもう一生会う事もないだろう。たぶん彼にも。彼女も彼もこれで呪縛が解けるのだろうか。何も聞かずに彼女を見送ったことは、最後の彼女に対する「自由」となったろうか。本当は何も聞けなかつただけだけど。

気が付けば空は黒い雲に覆われていた。本格的な夏の到来を告げる夕立になりそうだ。

デッキから早く車に戻った方が良さそうだ。

そう、間もなく夏がやってくる。誰の元にも夏の日差しが降り注ぐ、それは時に眩しく、時に熱く。

車が空港を離れた時、雨粒がフロントガラスを叩いた。

ワイパーのスイッチを入れながら「彼女が年下でも悪くない」。

少しだけそんな気がした。

終わり